

「みやびをと我は聞けるを:Fengliu/Poongryu/Furyu:  
東アジアの美的概念検討にむけた(風流)の比較文化史の試み(上)」  
『図書新聞』2677号、2004年5月8日

みやびをと我は聞けるを  
やど貸さず／我を帰せり  
おそのみやびを

石川郎女が大伴宿禰田主に贈った和歌で『万葉集』第二巻に見える一首。冒頭の「みやびを」には「遊土」が、末尾の「みやびを」には「風流土」が当てられている。あなたは風流人だと聞いていたのに、泊めてもくれずに、私を帰した。なんて愚図で奥手な風流人だこと、という当てつけだ。これに大伴宿禰田主は、こう返す。「みやびをに 我はありけり やど貸さず 帰し我そ みやびをにはある」、と。あなたを泊めずに帰した私こそ、真の「風流土」なのだ、という居直りの返事だろう。周知のとおり、ここでは、「風流」の異なった意味のすれ違いが、贈答の妙をなす。石川郎女の言う「風流」は、異性ととの付き合いにおける洗練さの指標だろう。対する田主は、道徳的な節操、人格性を意味する言葉として「風流」を用いている。石川郎女の用法が、唐代以降の、場合によっては性的放縦や官能的な頽廃をも含む、舶来の最新流行の語意であったのに対し、田主は、

みやびをと我は聞けるを  
Fengliu/Poongryu/Furyu: 東アジアの美的概念検討にむけた  
《風流》の比較文化史の試み・上

稲賀繁美  
国際日本文化研究センター研究員・  
総合研究大学院大学助教授

敢えて晋代以来の、伝統的な「風流」の語意に沿って反論することで、議論をすり替えてみせた。果たしてこのおとぼけ、野暮でなかったかどうか。

風流とは何か? 今日においてても、中国語の「風流」とは、美風の余韻、人品・風采あるいは精神の卓越性に重きが置かれる用語であり、代表格は、陶淵明(365—427)の、「菊ヲ采ル東籬ノ下、悠然トシテ南山ヲ見ル」に指を屈する。近くは毛沢東(1893—1976)の「沁園春 雪」。秦の始皇帝や漢の武帝も文采に疎かなところが、唐の高宗も宋の太祖も風騷が少ない。成吉思汗にしても、弓矢や軍事に秀でるのみ。まことの「風流人物」の登場には今日を待たねばならぬとする、誇大妄想を憚らぬ自画自賛の詩。軍略家・政治家であるとともに文才も兼備してはじめて歴史に名を残す英雄たりうる、との自負が「風流人物」という語彙に託されている。

(以下次号)

\* 関周植氏(湖南大学教授)の講演、「風流の東アジア—美を生きる技法—」第168回日文研フォーラム(4月12日)での筆者のコメントを、関氏の許可の元に公表するものである。

思  
考  
の  
隅  
景